

2021(令和3)年度 第2回 Salon De 大学コンソーシアム大阪
学生のウェルビーイングとモチベーションを高める教育・支援について
～学生エンゲージメントの観点から～
開催報告

日 時： 2021(令和3)年 11月 22日(月) 18:00～19:30 * 情報交換会 19:30～20:30
会 場： オンライン(Zoom)
講 師： 山田 剛史氏(関西大学 教育推進部 教授)
申 込 者 数： 14 大学 31 名(うち会員外 3 大学 3 名)
参 加 者 数： 10 大学 21 名(うち会員外 3 大学 3 名)
実 施 結 果： 大学コンソーシアム大阪 HP の「PDF/参加者アンケート」参照
企 画・運 営： 大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会
司 会 進 行： 清水 栄子氏(研修部会推進委員会 委員、追手門学院大学 基盤教育機構／教育開発センター 准教授)

1. 開催概要

大学は社会への移行(トランジション)を円滑にする上でも重要な場所だが、その社会が大きく変わる中、大学の果たす最も重要な役割は、学生が社会の中で自律的・持続的に学び、健康で幸福に生きるための機会を提供することである。

不安定な社会情勢に此度のコロナ禍でのキャンパスライフ(遠隔授業や課外活動の自粛等)が重なり、学びへのモチベーションの低下や孤独感等のメンタルヘルスの低下が強くなっている学生のウェルビーイングやモチベーションを高めるための教育・支援について、学生エンゲージメントの観点を中心にとともに考える。

2. 講演内容

- ・ウェルビーイングとは、「Well＝よい」と「Being＝状態、あり方」が組み合わされた言葉で、心身ともに満たされた状態を指す。
- ・今の学生がどんな時代を生きているのかに意識を向けず、自分たちの生きてきた感覚で向き合うと相当づれていると感じることがある。
情報化が進み、多様性が求められているなかで、あらゆるものごとをスマートフォンの指先一本で選択・判断する感覚が身体化されることにより、学生の精神状況にどれだけ影響を与えるのか、また自分がここにいるという感覚が弱くなっているのではないかと危惧される。最初からすでに分断されている状態からスタートする学生は「主体感」「つながり感」が弱まっているのではないかと考えられる。
- ・学生が学校から社会に円滑に移行しウェルビーイングを獲得していくためには、エンゲージメントが中核にある。学生が自分自身や他者に対してどれだけ関与できるかが、ひいては社会に出た時のエンゲージメントに繋がり、そのエンゲージメントはウェルビーイングに繋がっていく。その学生のエンゲージメントを高めるために大人ができることは大学であれば教職員、家庭であれば親のエンゲージメントであり、それを中核としてウェルビーイングを高めていく社会作りが必要。
- ・学生の発達に応じて過不足ない支援をすることが重要。ただし、学生が自律できるよう学生への関与の度合いを徐々に下げ、いつどのようにするかの見極めは難しい。
- ・学生に関わる大人自身が疲弊し、自身の人生が楽しくないと感じていれば学生を楽しませることはできない。大人が充実した人生を送ることが重要。
- ・学生エンゲージメントを取り巻くものには「信頼」、「正直さ」等がある。大人が学生に対して真摯な態度で臨み、嘘をつかないことは重要である。コロナ禍でのオンライン授業で学生を信頼せず、ルールや規定で締め付け、勉強をさせるために課題地獄となってしまうのは非常に日本のアプローチであり、学生と大人が対等な関係で大学を作っていくというところに向かわなければと窮屈な状態になってしまう恐れがある。

- ・学生エンゲージメントは、「行動的」「認知的」「情緒的」の三領域で構成されている。また、学生だけが持つものではなく、そこに関わる教職員と学生の両方を含む概念である。そのなかの「情緒的」なエンゲージメントは非常に重要である。大学教育の中では、それを重要視している教職員はいるだろうが、組織としてあまりうまく対応できていないところを感じられる。
- ・オンライン授業で「学びの孤立化」を防ぎ、学習意欲を維持・向上させるためには、学生が感じる「自分は無知だ」などと思われている不安を取り除き、心理的安全性を確保できなければならない。また、学習活動に対する教員からのフィードバックも学生の学習意欲や学習成果を維持・向上させうる。毎授業後に ICT ツールで振り返りを行い、多様な観点からの感想等を次回の授業の冒頭にフィードバックすると、回を重ねるごとに文字数も増え、内容も豊かになった。学生は教員にきちんと読まれているか不安であり、その評価を求めていることがわかった。フィードバックがなく、教員が管理目的のために課題ばかりを提出させ、成績評価時に一気に評価することは学生のモチベーション醸成の点からは非常に弱いと言わざるを得ない。
- ・方法や手段が変わっても教育の本質は変わらない。学生が主体的に学んでいくうえで学ぶことは楽しいということを経験してもらうのは大事である。コロナ禍で分断されている状況だからこそ、その重要性を痛感する。



講師：山田 剛史 氏



司会：清水委員

3. 質疑応答

質問1: フィードバックは重要だということを再認識したが、物理的に時間がないためどうすればよいか。

⇒時間を確保するのは難しいが、以前の紙ベースで進めていた時に比べれば ICT を活用することで時間は短縮できる。慣れてくるとどのコメントが良いかがわかってくる。学生は見てくれているかどうかを不安に感じ、どうせ見ていないだろうと感じている。学生へのフィードバックを全て行うのが難しい場合でも、何点かの質問やコメントを取り上げることで、「見ている」ということは伝えられる。「コメントが面白かった」などと口頭で伝えるだけでも随分と違ってくる。

質問2: フィードバックについて、見てくれているから書くという外発的な動機付けにならないような工夫は何か。

⇒外発的な動機を取っ掛かりに、書く楽しさや振り返ることの重要性に気づくようにし、さらにエンカレッジすることをしている。認知面・行動面・情緒面で包括的に少しずつエンカレッジを行っている。

閉会挨拶として清水委員より「講演やグループワークでの話し合いを通して、自分の中で残ったキーワードを3つ挙げるとすれば何が残るかを考えてもらいたい。そして自分にとってのウェルビーイングは何か、学生たちのウェルビーイングのために私たちはどのような教育支援を行っていけば良いかをこの講演を機会に考え、今後に活かしていければと思う。」との言葉があった。

4. 参加者アンケート結果

「参加者アンケート」に掲載。

5. 情報交換会

サロン終了後、サロンの参加者、講師によるオンライン情報交換会を開催。情報共有や意見交換を行い、参加者間のネットワーク構築だけでなく、個々の理解を深めそのことを共有する場として活用された。

以上